

### 13) スズラン=鈴蘭

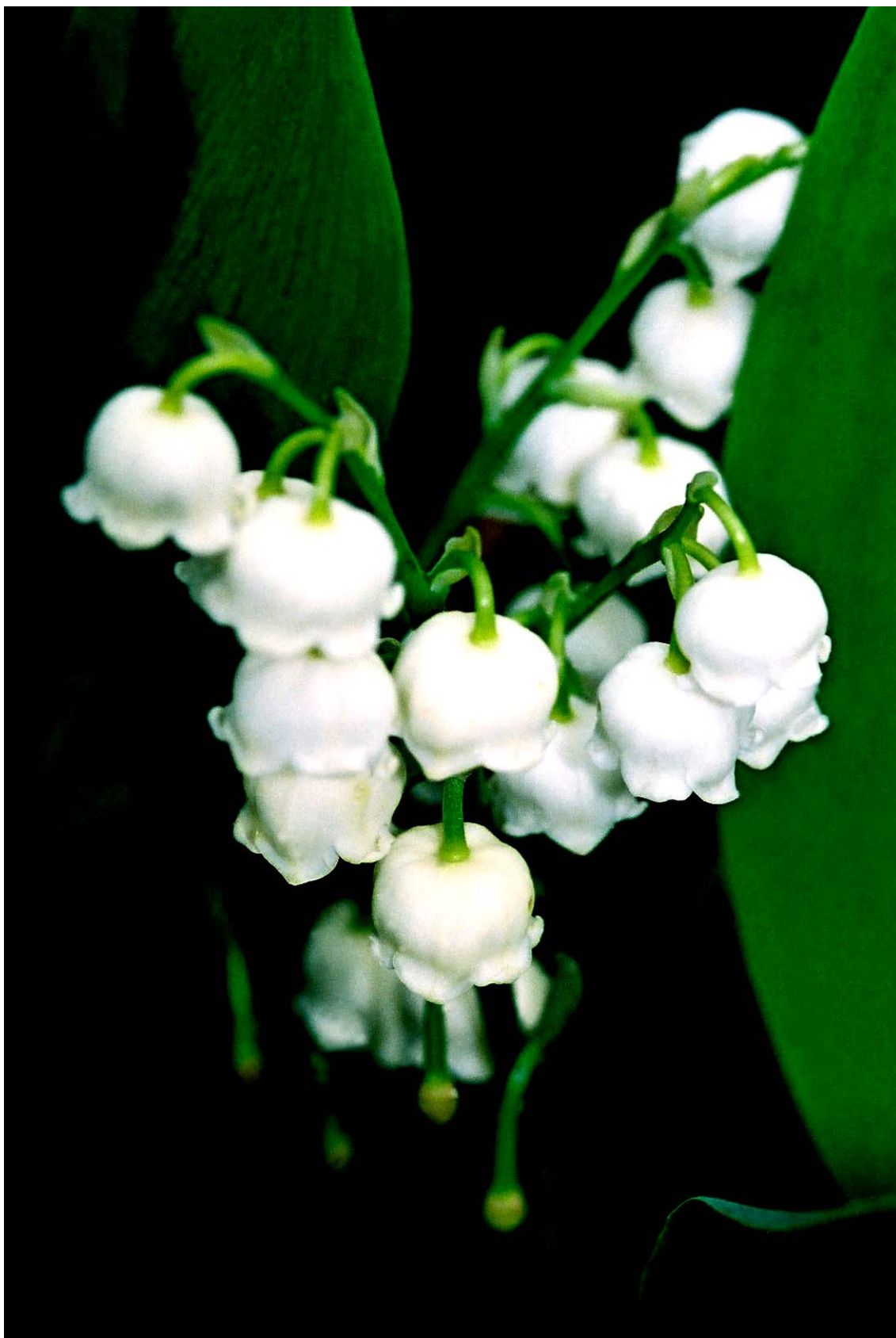
スズランはユリ科の多年草で蘭の仲間ではない。ヨーロッパ、アメリカ、温帯アジアなどに分布し、1属1種でこの仲間は他にはない。北海道の草原や本州、九州の高原など、日本の山野に自生するものもこの仲間に入る。学名は『*Connvarllaria keiskei*』で、属名は谷間のユリを、種小辞は伊藤圭介のという意味である。

日本で園芸用に作られているスズランはほとんどがドイツスズランで、花も大きく日本産のものより作りやすい。その名の由来はもちろん花の形が鈴に似ていることによるもので、花をよく見ると花弁は6枚で基部が合着しており、いわゆる釣り鐘タイプとは少し異なり、口の広い壺型になっている。5月から6月にかけて香りのよい白い花を咲かせるが、最近の園芸種にはピンクの花もあるが、これはやや紫を帯びている。花は葉の間から花茎をのぞかせ、10数個の花を穂状につける。

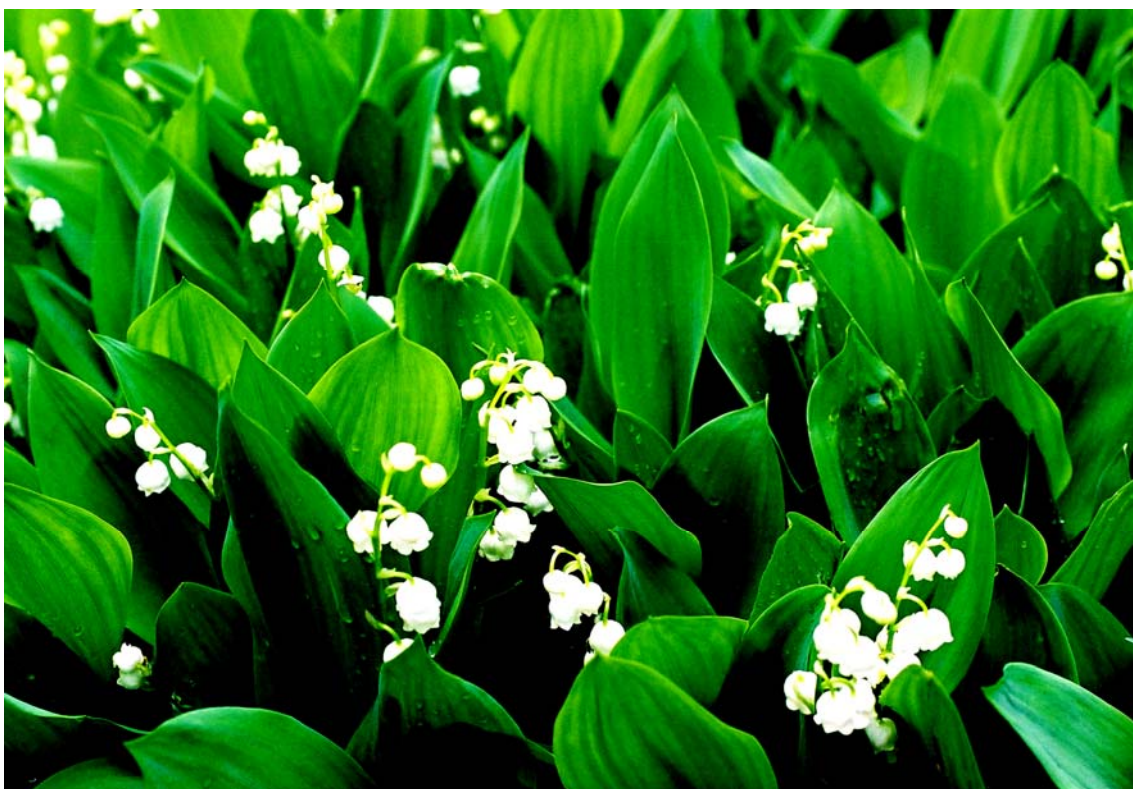
スズランはキリスト教では聖母マリアの花とされ、純潔の象徴になっている。またフランスの伝説では聖人レオナルド(Léonard=聖霊降臨祭11月6日)が、3日間も龍と戦って、その時流れ出た血の中から咲いた花とされている。この手の話は少々聞き飽きたかも知れないがご容赦いただきたい。北欧では春の訪れを告げるこの花は、春の女神オスタラを守護神としており、純潔の証でもあった。またヨーロッパではスズランは5月の花とされ、特に5月1日にこの花を贈ると、その相手が幸福になるといわれている。このためパリではスズランの花をプレゼントする男女の姿が、昔はあちこちで見られたが、今では地方都市でないと余り見られなくなったようで残念である。しかしこの風習はイギリスやドイツにも広がって、欧米諸国ではこの花の香を種々の香水にブレンドし、媚薬としても用いられている。

スズランは有毒植物とされコンバラマリン、コンバラリン、コンバラトキシンという3つの配糖体(05-02-00参照)が含まれている。これらの成分は同時に有毒植物の常として、その薬効も古くから知られており、ヨーロッパでは『aqua aurea』(黄金水)と呼ばれ、痛風やリュウマチの薬として用いられてきた。さらに捻挫したときにはこのエキスをすりこむとよいとされ、強心剤としても、利尿にも効果もあるといわれている。スズランの葉の形は食用になるギョウジャニンニクに似ており、北海道などでは間違えて食べて、中毒症状を起こしたケースや、死にいたったケースも見られる。

ドイツスズランを育てるのは難しくない。しかし関東以南ではどうしても夏場は暑がるので、それなりの対策が必要である。根もとには厚めの敷きワラ、直射日光を避けるための寒冷紗など、最低限のことは実行してあげたい。土質はあまり選ばないが、白樺やミズナラなどの落葉樹の下や、草原などに自生しているところから、排水がよく腐葉土の多い土がよい。殖やすのも簡単で秋、大きめの芽のついた地下茎を20cm ぐらいの長さに切りはなせばよい。茨城県や山梨県にはスズランの群生地があって、季節ともなると観光客で賑わう。



ドイツスズランの花、スズランは有毒植物である(さいたま市見沼区尾島邸)。



ドイツスズランの花。スズランは白色と思われがちだが、最近では淡いピンクの種も改良されているようである(さいたま市見沼区尾島邸)。



ドイツスズランの果実(長野県軽井沢町)。

[目次に戻る](#)